

# シラカバの恵み

旭川発 官民の挑戦

Ⓕ

## レットテル覆し新ブランドの予感

旭川市内の道立総合研究機構林産試験場敷地内に、今冬運び込まれた樹齢50年前後のシラカバ約30本が並ぶ。旭川家具の材料として北大雨竜研究林（幌加内）で伐採され、直径は20〜30㍍。丸太を眺めながら試験場の秋津裕志研究主幹（59）は「家具などに使う材として可能性が広がった」と研究の成果を強調する。

シガ強く、家具材としては不適とされてきた。ところが研究でシラカバの丸太を製材してみると、材の表面は白く、絹のような光沢。秋津主幹は「北国の北海道を連想する材としてアピールできる」と考えた。

直径24㍍以上だと無垢材としても使いやすくなることも判明。旭川市工芸センターと共同で食卓や椅子を製作し、木材に出っ張りの「ほぞ」を作り、穴に入れたつなぎ合わせるなどすれば、十分な強度を確保できることが分かった。

### ■「絹の光沢」

秋津主幹は成長が早く資源が豊富なシラカバに着目し、2015年に活用法を探索の研究に着手した。そのほとんどが製紙用チップ材として使われるシラカバ。幹が細いうえ、強度も不足しているという負のイメージ

「カー」「樹凧工房（美瑛）



林産試験場でシラカバの丸太を前に「北海道らしい素材として発信したい」と話す秋津さん（打田達也撮影）

し、家具作りに挑戦した。

### ■ 出品手応え

製材した6枚を家具用の接着剤を使って接合。縦約150㍍、横85㍍の食卓と椅子4脚が完成し、旭川デザインウィーク（ADW）に出品した。白を基調とし、ほのかな赤みが変化を与え、上品な仕上がりに来場者の注目が集まり、手触りを確かめる人も。杉達代表は「思った以上に表情豊かな材。買いたいと興味を示す人もいた」とし、木材を提携した清水省吾さん（32）も「身近な森から素晴らしい家具を生み出してくれた。森の価値を見直すきっかけにもなる」と手応えを語る。プロジェクトのメンバー

はADWでの成果に自信を深め、次は11月に東京で開かれるインテリアの国際見本市への出展を目指す。合言葉は「森から始まる」。家具材としての魅力を広くPRし、持続可能な森づくりにつながる優れた材であることを発信する。

優良なシラカバの丸太を供給する体制や、上昇する物流費に対してどう採算をの1人で家具産業を研究する静岡大の横田宏樹准教授（41）は「家具の名産地の旭川で、道民になじみ深く資源が豊かなシラカバを活用することで、新たなブランド構築につなげたい」と力を込める。

を経営する杉達浩昭代表 哨山で伐採された直径約30（49）は3月上旬、市内の突 ㍍のシラカバ1本を調達